

# 藍アイ

## 城東渭山同窓会 東京支部 会報

No.16 創刊16号 平成22年4月1日発行

発行人/戸田浩二  
〒102-0071 東京都千代田区富士見1-11-12  
アーバンコート1F マット株式会社内  
電話 03-5213-3447



学校長 毛利 久康

会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃は、母校のため物心両面からの暖かいご支援を賜り、厚くお礼を申し上げます。

同窓会からのご支援につきまして、一端を報告させていただきますと、昨年度の「君の夢に百万円」の支援事業では、国際的に活躍するピアニストとフルート奏者をめざしている2名と、大阪大学に行きながら司法書士養成の学校に通う1名の計3名を支えていただきました。今年度支援する者の選考会は2月に行い、将来音楽で国際的に活躍が期待される2名に決定をいただいております。

また、一昨年度の3年生で「寂聴奨学金」により経済的支援いただきました者は、地元4年制国立大学に進学できました。城東生の夢の実現に心強い励ましとなっております。そして同窓会の皆様によって設置されました空調設備のお陰で、生徒は他校の半額以下の少ない維持費の負担だけで快適な学校生活を送ることができており、深く感謝をいたしております。

私自身、本校へ13年ぶりに帰ってまいりましたが、新しい立派な校舎に生まれ変わり、その中に、懐かしい赤煉瓦、校歌「渭の山かげ」の碑、

そして門柱、ユーカリの木、創立記念のモニュメントなど、ごく自然にとけ込んでおります。その一つ一つの意味を生徒に伝え、次の飛躍の力にしていかなければならないと痛感いたしました。

最近、本校ゆかりの関寛斎氏の生誕百八十周年にあたり、問い合わせや行事への参加に追われております。関寛斎は、千葉で生まれ、江戸の末期から蜂須賀藩の藩医として徳島に入り約30年医師で大きな足跡を残した人です。現在の本校のグラウンドになつて居る所に住まいがありました。徳島大学医学部を作られた人でもあり、今本校の卒業生が毎年10名近く進んでいることは何か縁を感じます。

彼は晩年、北海道に移住し、北海道では開拓の神様のように尊敬されています。その方の生誕地千葉県東金市へ生誕百八十周年特別展のレモニーに、城東第6回卒業生の永井英彰氏と鳴門在住の関家の子孫の方と共に参りました。歴史の重みを実感したところです。

学校の現状については、進学成績につきましては約半数の生徒が国立大学へ進学できています。昨年春には医学部医学科に13人合格しております。

また部活動につきましては、全国でベスト4に入るのが4つございます。バドミントン女子は国体で4位、弓道部も国体女子団体で優勝しましたが、3人のうち1人は本校の生徒です。

首かるたも全国大会で4位に入りました。その他にも、全国大会常連の男子バスケットボールと放送、四国大会出場のラグビー、男子バレーボール演劇など「一人ひとり文武両道」のもてがんばつてくれています。

また、NHK日曜朝の「課外授業ようこそ先輩」という番組がありますが、今年度の高校2校に本校が選ばれ、瀬戸内寂聴氏が3日間授業をして下さり、30分ですが全国に2度放送されました。

それ以外にも、本校に硬式野球部ができて14年目ですが、ついにプロ野球の選手が誕生いたしました。武内久士氏で、広島カープに指名されました。ちょうど創部10年の年に卒業した生徒の快挙でした。応援をお願いいたします。

昨年度の創立記念講演会では、城東第21回卒業で「おはようたくしま」のアナウンサーをされた後、千葉を拠点に朗読活動をされている森優子（旧姓太田優子）氏に「心と心を繋ぐため、今こそ美しい言葉を」と題してお話をいただき、「杜子春」や「吹く風を心の友と」の朗読も交え、人生を生きていく中で、人と人との心を繋ぐ言葉の大切さをお教えいただきました。

このように、県下一恵まれた環境で、同窓会と地域に支えられ本当に幸せな学校だと思っております。ところで、今本校の置かれた状況につきまして報告させていただきます。高校入試において総合選抜制度が平成16年に廃止され、学区制は存続しながらも希望校を受験できるようになっており、魅力ある学校が求められております。近隣の普通科高校2校も新築落成式をこの4月と7月に行うことになっており、学校の教育力が学校の将来を決める時代がやってきております。同窓生の皆様が母校として誇りに思っていただけるよう鋭意努力を続けて参りますのでご支援を宜しく願います。

最後になりましたが、同窓会東京支部の益々のご発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

### 同窓会だより

#### 東京支部だより

東京支部長 戸田浩二(城東26回卒)

今年の東京支部の総会は6月の第三日曜日である21日に開催されました。

今年の開催場所は、料理の鉄人でもおなじみの陳健一さんの赤坂四ッ川飯店です。今回、幹事年である27回の方々に頑張ってもらったこともあり、80名超で昨年以上の参加が有りまして。

今回の特徴は、27回幹事の提案により、徳島の物産を開会前に販売すること。徳島県事務所の田尾さん(28回)の手配により、竹ちくわ、フィッシュカツ、ちりめん、干しエビといった我々の年代に馴染みの深いものから、最近話題の徳島ラーメンも揃えてもらい、好評の内に完売となりました。

総会は、外部より「おしゃべりマジック」マギー隆司さん(マギー司郎さんのお弟子さん)のマジック(漫談?)と、津軽三味線澤田流、澤田勝紀さんによる迫力の有る演奏をして頂き、参加して頂いた方々に今までのエンターテイメントな会を楽しんで頂いたものと思います。会場が四ッ川飯店ということでもありませんので、おいしい料理も満喫して頂けたと思います。また、お店もこういった会に慣れているので非常に手際が良く、温かい料理を皆さんに堪能して貰えたと思えます。



現在の正門 (旧プールの辺り)

徳女の方の参加が少なくなってきたのはやむを得ないのですが、なるべく会報に近況を寄せて貰える様働き掛けていきたいと思えます。また、若い30代、20代の方々の総会への参加、Webでの情報交換も増やしていきたいということがあります。最後になりましたが、今年も徳島

から遠路ご参加頂きました同窓会本部、並びに城東高校の方々にも厚くお礼申し上げます。また、今年の総会幹事の方々、学年幹事の皆様、事務局の皆様、どうもありがとうございました。今後とも、ご協力よろしくお祈り致します。

#### 会費納入のご案内

年会費の納入に関しましては、なるべく同封の振替用紙をそのままご使用頂きATMをご利用下さい。支部の手数料負担が120円(窓口)→80円となります。

徳女41回以前の方々、並びに学生の年会費は免除となります。

#### 事務局からのご連絡

事務局メンバーは2年が任期となります。本年、9月以降に支部長、副支部長、会計をご担当頂ける方を募集致します。学年持ち回りですので、城東23回、25回、27回以降の方を中心にご担当頂ける方を募集致します。

収入		支出	
前年度繰越金	786,612	総会費用	517,000
維持会費	538,500	印刷費	234,150
総会費	591,500	通信費・雑費	209,505
助成金	50,000	会議費	62,215
寄付金	60,000	総会関連雑費	74,385
協賛金	35,000	サーバー維持費	57,624
利子	664	小計	1,154,879
		次期繰越金	907,397
	2,062,276		2,062,276

借方		貸方	
ゆうちょ・総合口座	793,633	次期繰越金	907,397
ゆうちょ・振替口座	66,880		
現金	46,884		
	907,397		907,397

城東渭山同窓会	支部長	戸田浩二 (城東26回)
東京支部	副支部長	伊賀公一 (城東25回)
平成21年度事務局	会計	秋田ゆう子 (城東26回)



『同窓会の幹事学年になつて』

城東27回 赤松(斎藤) 早苗

ある日、なつかしい高校時代の友人から、同窓会の連絡が回ってきた。

東京在住のメンバーで、集まるというので、なつかしさもあり、楽しみに出かけていった。意外と知らない人がいっぱいびつくりだった。10クラスあっただけに、初めてしゃべった同級生もいたし、初めて存在を知った同級生もいた。卒業アルバムを見ながら、「昔と変わった!」だの、「髪がよばい!」だの、「昔より若返ってる!」なんて、「?」だの、にぎやかに自己紹介しながら始まった。

しかし、やはり、ただ招集されたのではなかった。実は、同窓会総会の幹事学年だということである。なるほどね、そういうことか。でも、まとめ役の磯田君の熱意に押され、みんなで、がんばろうということになり、何回か集まるようになった。みんな、仕事を持ちながらも、それぞれが、できる範囲で、協力しあった。すばらしい団結力!さすが、城東高校OB!適材適所で、動く動く!

普通の同窓会だけだったら、こんなに、みんなを知ることもなかっただろう。いざ総会が終わってみると、大変だったと思っていたことが、なつかしい思い出になっている。今後は、1年に1回、総会の後で、同窓会をしようということになった。先輩たちも、どうやら、こんな感じで、同窓会をひらいているようである。

同窓会に参加し、みんなとしゃべって思っていたのは、自分がいかに、高校時代のことを覚えてないか、ということ。個人差があると思うが、私に言えれば、中学までは、いろんな事を覚えていながら、高校の事は、かなり忘れていたのである。受験、受験と追い立てられていたり、それに疑問を感じていたり、大学に行く意味が明確にならないまま、受験をむかえてしまったり、自分のやりたい事がみつからないまま、探す手立てもなく漠然と毎日を送っていたりだった気がする。でも、その時は、毎日の些細な事に一喜一憂し、毎日を楽しんで過ごしていたとは思わなかった。

同窓会で、いろんな同級生に会ってみて思った。ユニークな同級生がいっぱいいたんだということ。自分の周りだけの狭い世界しか見てなかったし、それで、満足してしまっていたんだ、と思う。

私は、文系だったけど、理数系の人も、交流を持てば、よかったかもしれない。我が子たちの通った都立高校は、文系も理数系も混ざっていて、しかも2、3年生はクラス替えなし。なるほど、それもありだな〜と思った。

今回の同窓会のおかげで、少しずつ、いろんな事を思い出してきた。文化祭で、劇を上演したことや、体育祭での先輩達の棒倒しの競技に圧倒されたこと。修学旅行でのいろんなハプニング。動物園から時折聞こえてくる象の雄叫び。なぜか、昔で底がすべるプール。狭くて臭い部室。クラス入り乱れてのお弁当タイム。個人的な先生の面白い授業。思い出してくと、結局、のびのびと自由に楽しく高校生活を送っていたんだ、と思った。城東高校は、なかなかいい高校だった。そんなことを、何十年かぶりに思い出せただけでも、同窓会に参加し、また、総会の幹事に関わってよかったと思う。

「藍の色」

城東25回 伊賀公一

潤山同窓会東京支部の皆様、はじめまして。25回卒業の伊賀公一です。どうぞよろしくお願いたします。

私は、板野郡生まれの徳島市内育ちで城東高校卒業後、進学のために上京し、そのまま7年間東京に在住していました。社会勉強のために様々な仕事をしました。1983年二人目の子どもができたとき、孫を楽しみにしていた両親のそばで育てたいなとか、子どもたちに阿波踊りを教えたいなと思いついて、いわゆるUターンというやつで徳島に戻りました。徳島ではコンビニエンスストアに勤務していましたが、東京暮らしの反動か徳島の豊かな自然が嬉しく、山や海で年中キャンプをして遊んだり、吉野川や那賀川、新町川でもカヌーを漕いだりしてました。もちろん、久しぶりに会った昔の友人達と会って交流したりしておりました。

徳島から東京に来てまた徳島に戻り、さらに東京に出てくると言うのは、「Zター」とでも言うのでしょうか。1996年徳島大学の教員をしてもらった友人が、東京でIT系のベンチャー企業を起業し、誘われまして家族を連れて再度上京しました。2002年までの7年間銀座のオフィスと荻窪の自宅を休みなく通っておりまして。東京にて遠く故郷の野山を思うと、もっと遊んでおけば良かったと思うばかりでした。2003年にベンチャー会社を畳むことになり、以前より食品関係の仕事に関心があ



旧校舎

り、有機野菜や自然食品の開発・流通を行う企業に誘われたこともあり転職しました。全国の低農薬・低化学肥料栽培農家を回りながら、日本の食について多くを学ぶことができました。

2007年1級カラーコーディネータ試験に合格したことをきっかけとして、30年続いた会社員生活に別れを告げました。東京に出てきた頃から取り掛かっていた色弱者や高齢者などの多様な色の感じ方に対応したやさしい社会をつくるためのNPO設立に参画し現在に至ります。このNPOを少し説明させていただきますと、NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構(CUDDO)と言いまして、1990年代ごろから、どうも世の中がカラフルになってきて、彩りが多いのは結構なことなのですが、グラフや電車の路線など物事をわかりやすく説明するために、やたらと色使いがなされるようになってきました。携帯電話やデジカメの充電器や、電子機器類には発光ダイオードが色分けされてついたりします。ところが、このような色使いは、誰も皆同じような色を感じるという前提がなければなりません。実際には日本人の場合、生まれつき「赤緑色盲・赤緑色弱」と言われる男性が20人に一人(5%)、女性は500人に一人(0.02%)いるわけです。ヨーロッパの白人では男性の8%、北欧では10%の割合となり、日本全体で320万人の男女が「色覚異常」と呼ばれているのです。これだけ割合が多いと、「異常」ではなく「多様性」であることが常識となつていきます。CUDDOでは人の色覚を科学的に解明し、デザインにおける対策方法などを提案しているわけです。アドビ社が全世界的にCUDシミュレーションを採用していただき、ナナオ・NECも色弱者の色覚シミュレーションを搭載しています。また企業の社会経営責任(CSR)報告書の約

25%は色弱者や高齢者に見分けやすくデザインし、結果としてCUDマークを掲示しています。2009年には「日本の新しいデザイン活動」ということでグッドデザイン賞を受賞いたしました。このように、カラーユニバーサルデザインは日本が発信源となり世界に広がろうとしているのです。そのような仕事に関わっていただけることに喜びを感じています。

さて、合計すると20年近く東京にて生活をしていくわけですが、徳島の吉野川をはじめとする自然が好きな人たちがアウトドア関連の人たちとの付き合いはありますが、実はあまり徳島出身の方々と仕事をすることはありませんでした。そんなとき、同級生から潤山同窓会東京支部の同期会に誘われて、久しぶりに会いました。卒業式の日には確かに同じ場所にいた友が、それぞれ理由でふるさと徳島を離れ東京に生活し、年齢も重ねており同級生の成長を知ることができました。その後東京支部に誘われて、総会に参加させていただきましたが、ずっと上の世代の先輩の皆様や、若い世代の後輩の皆様が城東高校というひとつの樹の根につながり、それぞれの幹や、世代の枝・小枝が広がるように集っておられるのを見て感動いたしました。年に一度の総会ですが、確かに自分はその時・あの日徳島の城東高校にいたのだという事を思い出して、自分の場所や位置を知るためにも参加させていってほしいと思っております。

「とくしまマラソン」

城東34回 杉浦 晃

私は、小学校5年生から高校3年生までの8年間を徳島で過ごしました。その後、東京に進学した後も10年ほどは度々帰省していましたが、父が定年となり実家のある愛知に引越してからは、徳島とはすつかり疎遠になってしまいました。

2008年4月から始まった「とくしまマラソン」を機に、17年ぶりに徳島を訪れました。レース前日、ひさしぶりに市内を歩きましたが、昔住んでいた家や城東の校舎は建て替えられ、ご近所だった動物園も空き地に様変わりし、懐かしさというよりはただただ時間が経ってしまったなどの印象を受けました。

レース当日は快晴、旧パークホテル前をスタートし、沿道にチャーハン屋のおじさんの応援姿を見つづ吉野川大橋へ、河口に建設中の新しい橋には驚きました。土手の上を走り出したころ、青々とした吉野川を背に眉山が見えてきました。昔はこの河川敷が大好きで、自転車や原付に乗って川を

眺めにきたり、高校では部活に来たりと、私にとって原風景となる場所です。幼稚園児のダンス、生バンドや阿波踊りなど地元の方の応援が背中を押します。給水地点では、地元のおばはんがゼッケン番号と参加者名簿で私の名前を探しだし、「杉浦はん、がんばってよ!」との大激励、すだちパワ―を貰いました。コースは西条大橋通り中間地点を折り返し、その後は吉野川の南岸を下ります。下りは土手の内側を走るため景色も単調で、体のあちこちが一斉に悲鳴を上げだします。だんだんと大きくなる眉山を目標に走りました。鮎喰川沿いのラグビー場に懐かしみつつ、私が高校入学した年に創設された城の内高校を通り過ぎ、田宮運動公園では眉山を真正面に見ながらゴールです。ご婦人方による完走者への万歳三唱、一目散に荷物を探し届けてくれる高校生、うどんのサービスなど色々なおもてなしが疲れ切ったランナーを癒します。

「とくしまマラソン」は、様々なマラソン大会の良いところ全てを取り入れています。時間制限も長く、徳島出身者でなくとも市民ランナーにとっては日本トップクラスの大会だと思えます。

その夜、学生時代からの同級生に久しぶりに会うことが出来ました。一日中中で感じてきた風景と、旧友の「お帰り、ようもんで来た」との一声に、ようやくふるさとに帰ってきたという実感がこみ上げてきました。涙が出そうでしたよ。これからは毎年「とくしまマラソン」に出るぞ、と心に決めました。

徳島から戻った5月、こちらでも久しぶりの同級生から突然電話がありました。6月の「潤山東京支部総会」のお誘いです。帰郷直後の同窓会、あまりのタイミングの良さに驚かされました。総会では、同級生、様々な先輩や後輩方とお会いし、地元の話に楽しいひとときを過ごすことが出来ました。また、マラソン関係のお仕事をされている先輩もいらつしやり、改めて何か縁のようなものを感じました。

「とくしまマラソン」の人氣はうなぎ登りです。2010年大会は定員を6,000人と初年度の2倍に増員したものの、申込は2日で定員を超え締め切りとなってしまいました。年々ハードルの高いレースに変わりつつありますが、いつの日か城東同窓会が吉野川を走る機会がもればと夢見ております。

追伸・34回連絡用にメールアドレスを作成しました。アドレスはizanz3@gmail.comです。

「城東高校を卒業して」

城東38回 古谷 美智子

城東高校を卒業して、徳島から東京に移り住み23年経ちました。6年前より世田谷の池尻大橋で焼鳥屋を営んでおります。東京では徳島出身の方に出会うことは珍しく、まして城東出身の方と出会うなど想像もできませんでした。ところが、我が焼鳥屋に徳島出身!城東高校卒!!の先輩が来店。ご近所にお住まいで、大いに盛り上がり、以来よくいらしていただいております。

先輩方が集まると店内は徳島弁・阿波弁になり、「ほなけど」「ほんで」「やんよったんよ」とまるで徳島にいるみたいでなかなか楽しい気分になります。

ところで、当店は「とり方(ほう)」と申します。私と夫の二人で営む小さな13席の店です。この店名ですがフランスの映画監督のフランソワ・トリュフォーにちなんで、まあ、ダジャレです。この監督の映画は女性への敬意にあふれたフェミニンな作品が多く、この映画みたいに女性に優しい、仕事で疲れた女性が気軽に一人で寄って貰えるような店にしたい、という思いで名付けました。焼鳥屋といえは煙もくもく、おじさんばかり、というイメージも多いですが、除煙機をつけ、願いかなって女性のお客様も多く来店して貰えるようになりました。

当店は、鳥専門店焼き鳥の他、レバ刺し、砂刺、とり刺、サラダなどの一品料理がございます。また、夫が日本酒好きで珍しい見たこと無いような日本酒を揃えております。

東急田園都市線・各停で一駅、池尻大橋下車徒歩1分。お近くまでいらしたら是非、ご来店ください。

焼鳥とり方 世田谷区池尻2-31-23  
TEL03(3413)0790  
木曜日定休

